

資料（史料）

満州国で捕虜になったB29搭乗員の証言

倉 橋 正 直

【一】資料の由来

中国吉林省档案館（とうあんかん）所蔵の関東憲兵隊司令部資料の中から、満州国で捕虜になったB29搭乗員に対する訊問調書が見つかった。敗戦時、憲兵隊が焼却をはかったが、迫ってくるソ連軍から逃れるために、焼却を途中で中止し、焼け残った書類は憲兵隊司令部の中庭に穴を掘って埋めて、急いで脱出する。それが一九五〇年代に偶然、発見され、現在、同档案館に保管されている。

B29は一九四四年中ごろから実戦に登場する。当初はインドを基地にして、ヒマラヤ山脈を越えて中国の成都（四川省）に前進基地を設ける。そこから、九州北部、満州国南部などを空襲した。しかし、一九四五年に入ると、B29部隊は太平洋のテナアン島に移り、以後、日本本土はB29の徹底的な空襲を受けることになる。

比率こそ少なかったが、しかし、空襲を行なったB29が多いので、撃墜されたB29もある程度の数にのぼった。落下傘で脱出した搭乗員を捕らえ、その地の憲兵隊が訊問した。撃墜されたB29がある程度の数である以上、捕虜になった搭乗員に対する憲兵隊の訊問調書も本来、相当多数、存在したはずである。しかし、敗戦時、関係書類はすべて

焼却されてしまったので、日本内地では、そういった類の訊問調書は残らなかった。

一九四四年一月七日と二一日、成都基地を発進したB 29は、満州国の奉天市（現在の遼寧省瀋陽市）にあった満州飛行機株式会社（工場を空襲する。両日とも何機か撃墜される。撃墜されたB 29搭乗員の捕虜を憲兵隊が訊問した調書が奇跡的に残る。焼かれたり、土中に長い間、埋められていたので、たしかに文字を判読できる割合はそれほど高くない。それでも、これまで全く知られていなかったB 29搭乗員の捕虜に対する憲兵隊の訊問調書が発見された意義は大きい。以下、訊問調書の内容を紹介してゆく。

B 29の定員は二一名。彼らの階級は全般に高く、操縦士を兼ねた機長は大尉か中尉であった。副操縦士、航法士（ナビゲーター）、機関士、爆撃手が将校で、将校がほぼ半分を占めた。残りの射手などは、すべて下士官（多くは軍曹）であった。

七日の空襲で撃墜されたB 29のうちの一機では、二人の射手だけが助かっている。また二一日に撃墜された二機のうちの一機は鞍山西北九〇キロ（六〇キロという記載もある）付近で撃墜される。この機の搭乗員は全員（この場合、なぜか一〇名であった）、助かっている。前者の所属部隊や機体番号は不明であるが、しかし、後者は所属部隊や機体番号までわかる。すなわち、第二〇爆撃隊、五八飛行団、四六二戦隊に所属する七六九中隊で、彼らの乗機の機体番号は四二五〇五であった。

【二】 B 29の部隊編成

まず、この時の捕虜を紹介する。一月七日の空襲で捕虜になった二人は、ともに射手で下士官であった。オーレ

ター・アーナン・ハース(二一歳)は右側射手で、中等学校三年中退後、パン焼き職人・自動車運転手をする。一九四一年一二月に徴兵される。もう一人のベックス(二三歳)は左側射手で、中等学校卒業。仕事は農業で、妻と子ども(一人)がいる。同じく一九四一年一二月に徴兵される。四二年一二月、フロリダ州陸軍航空隊射手訓練所に入所。四四年二月、伍長、五月には軍曹になっている。

【表1】は二月二日の空襲で捕虜になった一〇名の名簿である。いちばん左側の一一番は中隊番号が違っているので、所属部隊は別である。五名が将校。観測手は爆撃手のことであろう。出撃回数は、機長が一〇回で最も多く、あとは六、七回である。

機長のジョン・キヤラバン・キャンベル大尉は一九一九年一〇月二四日生まれの二五歳。ケターフィルト飛行学校に入校。パナマに転出。また、まもなくカンサス州ウォーカーフィルトに転出。十月まで該地に滞在。その後、ニューヨークから船により、カルカッタに到着。爾後、バーバラに移り、三週間ほど該地に滞在。一二月中旬、成都に着したという。「B29ニ搭乗スル迄ハ 四発機ヲ四〇〇時間修得□□」とあるから、彼はベテランの飛行機乗りであった【注】。□印は欠損で読めない部分。その字数も不明。以下、同じ。しかし、成都基地からの出撃では、運悪く最初の出撃で撃墜され、捕虜になったことになる。

次に部隊編成である。第五八爆撃教育飛行団(在カンサス州ウォルガ。アーノルド大将がトップを兼任)、第二〇爆撃飛行戦団(在印度カルカッタ州)、第二二爆撃飛行戦団(在サイパン。ハンソン代将がトップ)。この三つがアーノルド大将の指揮下にあった【注】。各レベルの組織の名前は資料で使っているものを、そのまま用いた。】

第二〇爆撃飛行戦団(【図1】では爆撃隊としている。)の下に第五八飛行師団が置かれた。その中に第四〇戦隊、第四四四戦隊、第四六二戦隊、第四六八戦隊の四つの戦隊があった。インドのベルドバに置かれた第四六二戦隊には、

表1

8

米空軍 俘虜名簿

番号	氏名	中隊	機号	階級	任務	年令	出身
1	ジョン キヤラバン キャンベル	七六九	四三五	大尉	機長	三五	一〇四
2	ジョーン マッコ	〃	〃	中尉	副操縦	二八	八回
3	マゴーマックリチャード ウェルス ウォース	〃	〃	〃	〃	〃	七回
4	アレクサーベルゲルラルフ	〃	〃	〃	〃	〃	七回
5	リフスコム ベンジマン オーマンド	〃	〃	〃	〃	〃	七回
6	ダニエル ジョンスチーバー	〃	〃	軍曹	航法士	二六	六回
7	ラルフ メルブイン グッドイン	〃	〃	〃	観測手	二四	七回
8	ジョー ジイーユトン プラウマン	〃	〃	〃	機長	二七	一四回
9	オーレニレスクーパーマン	〃	〃	〃	機長	二七	一四回
10	アーロン ワーレン エルドレマド	〃	〃	〃	機長	二七	一四回
11	エルベイエドワード	〃	〃	〃	機長	二七	一四回

本部と七六八、七六九、七七〇の三個の中隊があつた。本部には、人事、情報、作戦・教育、および補給の四つのセクションがあつた。第四六八戦隊には本部と七九二、七九三、七九四の三個の中隊があつた。

尾翼にそれぞれの機が所属する部隊の識別マークが描かれていた。【図2】は捕虜の供述に従つて記したものである。この図と、戦後の資料を比べると、第四〇戦隊と第四四四戦隊の識別マークが逆になっている。日本側からすれば、尾翼のマークで、進攻してきたB29の所属部隊名が判明する。これは大きな情報になる。

B29をどの程度、保持しているかが取り調べ側の最大の関心事であつた。だから、保持しているB29の機数について繰り返し質問している。次はその答えである。当初、各中隊の兵力は九〇機で、総兵力は約一五〇機内外であつた。その後、逐次、増強されていった。一〇月中旬、各戦隊を三個中隊に改編し、余剰飛行機や機材は各中隊に分配した。一月中旬、各中隊の保有数は約一五機内外になる。一戦隊に三個中隊、四戦隊あるので、中隊の数は二二になる。だから、全体で約一八〇機のB29を保持していた。

また、一個中隊に各種の飛行機が約三〇機あり、そのうち、一五、六機がB29であつたという。残りは輸送機や防空戦闘機であつた。

次は一個中隊の兵力である。空中勤務者が、将校五〇、下士官七〇、計一二〇名。地上勤務者は、機械、電気、兵器、油差し、その他で合計一〇四〜一二〇名。それに「雑役事務兵タル勤務者」が一〇〇〜一二〇名。以上、合計三六〇名であつた。また、憲兵(MP)がベルトバ基地に一個中隊(五、六〇名)いた。B29に搭乗する空中勤務者は将校と下士官だけであつたが、地上勤務や「雑役事務」には多くの兵隊がいた。

カルカッタ州にあつたベルトバ基地の様子である。巨大な天幕が宿舍で、将校と下士官用に分かれている。その間に食堂と事務室がある。ベルトバ基地には高射砲が備えられている。飛行機の誘導路の左右に馬蹄形の掩体壕が多数



図2

ある。掩体壕の奥行が四五呎（フィート）＝約一四mということから、戦闘機などの小型機用であろう。

基地の慰安施設として、酒保、下士官・将校集会室、赤十字慰安所などがあつた。ビール、その他の日用品や菓子を販売していた。映画施設もあつた。給与は、少尉が週給一五〇ドル。将校（尉官）の場合、基本給の外、在外手当が二割、空中勤務手当が五割ついた。□給兵が五〇ドル、一等兵が五四ドル、伍長が六六ドルであつた。

アメリカ軍将兵がインド基地で、このような質素な生活を送り、また比較的低い給与に耐えていることを聞き出して、取り調べ側は、アメリカが容易ならざる敵であることを改めて再確認させられたのではなからうか。「或ハ在印時ニ於ケル生活状況 給与等ノ比較的質素ナル点等ヨリ見ルニ 米国人□□ノ許サザルヲ 窺シ得ベ□□」。

B 29の搭乗訓練はカンサス州ウォークフィールドで行なわれた。空中勤務者は、「機体ト共ニ空輸サレ」たが、地上勤務者は船で運ばれた。また、各戦隊はガンジス河口のナラ□□ディ島を爆撃演習場として使い、爆撃訓練を行った。

第二〇爆撃飛行戦団はヒマラヤ山脈を越えて、四川省の成都に前進基地を置く。成都基地群はA 1からA 7まで、いくつかの基地から構成されていた。調査には成都を中心にして放射状にその他の基地が描かれている。しかし、実際の地図では、成都の西南の方向に成都に近い順に新津（しんしん）、邛徕（きょうらい）、双流の三つの町がほぼ直線に並んでいる。今回の出撃でも、四つの爆撃戦隊は成都基地群のいくつかの基地から分かれて出撃した。第四〇爆撃戦隊はA 1基地、第四四四と第四六八爆撃戦隊はA 3とA 7基地、第四六二爆撃戦隊はA 5基地からであつた。

成都基地へは、ヒマラヤ山脈を越えて物資、とくに燃料のガソリンを輸送した。「併シテ現在 輸送機ノ不足ニヨリ B 29ヲ輸送機ノ代用トシテ 食料、部分品、爆弾等ヲ輸送シアル現況ニシテ」とあるように、C 46輸送機だけでは足りず、B 29を改造して輸送にあてた。「弾薬ハ野外ニ放置 「ガソリン」ハ飛□□ノ「タンク」アルモ常ニ不足勝ニテ□□」とあるように、成都基地ではガソリンが恒常的に不足していた。

インドの基地ではB29一機に六名の整備員がついた。しかし、成都基地では一〇〇名の整備員がいて、全部のB29を扱うようになっていた。整備員の数が少なかったもので、このように変更したのである。成都基地における日々の生活や慰安施設も、ほぼインドの基地と同じようなものであって、天幕宿舎で睡眠した。散歩・読書・トランプなどの外、慰安施設としてはバレーボールの運動施設ぐらいしかなかった。

長距離爆撃をとどこおりなく遂行してゆくためには、整った設備を持った本格的な基地が必要であった。しかし、それを前進基地の成都に短期間に作り上げることはもともと困難であった。B29のような大型機が発着する滑走路を建設し、維持することも大仕事であった。機体を整備するスタッフの数も足りなかったし、肝心のガソリンも不足した。要するに航空基地としての機能が全体的に劣っていた。

だから成都基地から一度に出撃する機数も少なかった。のち、テナアン島から数百機が一度に出撃する。しかし、成都基地の時代には、そのような大規模な出撃は不可能であった。また、ガソリン不足から出撃の回数もずっと少なかった。こういった状況から、成都を基地としていた段階では、戦略爆撃機としてのB29の働きはまだ鈍く、それ故、その脅威もそれほど深刻ではなかった。

一九四四年六月の、最初の八幡製鉄所への空襲に対する日本側の反撃が強烈だったことから、搭乗員は非常な不安感を抱いたという。そのこともあって、満州国への空襲は、日本本土空襲に比べ、「一般二損害少シト安全感」を抱いていたようである。

B29の月産額は二〇乃至三〇機であり、また、最近、P61戦闘機がインドおよび中国の基地に配備されたと証言している。P61戦闘機は双発で真っ黒に塗った夜間戦闘機である。さらにB29の後継機であるB32について聞かれ、機長のキャンベル大尉は、まだB32を見たこともないし、インドに到来したとは聞いていないと答えている。日本側が

この時点で、P 61戦闘機やB 32爆撃機のことを知っていたことに驚かされる。

【三】 B 29の性能

B 29に備えられていたノルデン爆撃照準器は、当時、最高の軍事機密であって、損傷した機から脱出する前に、必ずこの照準器を破壊することが義務づけられていたほどである。機が爆撃目標に近づく。「B 29ノ爆撃投下前 直線進入ハ約十分間以内ナリ」とあるように、爆撃投下一〇分前から、機は直線飛行に入る。その地点をLP（イニシアルポイント）といった。

爆撃手が搭乗機の数、高度、風向き、風速などの爆撃諸元の数値を照準器に入れる。そうすると、正確に爆撃を投下することができた。だから、ノルデン爆撃照準器によって、爆撃投下の精度は格段にあがった。また、編隊を組んでいる場合、全機がノルデン爆撃照準器を使うと、接触してしまうなどの危険があった。そこで、「而シテ爆撃諸元ノ測定ハ先頭機ニ於テ実施シ 無線電話ニヨリ之ヲ各機ニ伝達シ 全機 同一諸元ヲ以テ一斉投弾ス」とあるように、先頭を行く機だけがそれを行い、残りの機には無線で教え、一斉投弾することになっていた。

捕虜の供述の中に、ノルデン爆撃照準器という固有名詞こそ出てこないが、その照準器の機能はほぼ語られている。先頭を行く機だけが照準器を使うということを知っていれば、迎撃するほうは先頭の機に攻撃を集中すればよかった。先頭機が被弾し、順調に飛行できなくなれば、その機だけでなく、編隊を組む全機の投弾の正確さをそぐことができた。

また、投弾一〇分前に直線飛行に入り、しかも、後述するように時速三二〇キロ程度に減速していることがわかつた。

たとする。そうすれば、爆撃目標の五〇キロ手前から直線飛行することになる。そのことをあらかじめ知っていれば、迎撃側に絶好の攻撃のチャンスを与えた。

レーダーについても詳しく供述している。まず、「航法ニ供スルヲ主トシ 爆撃ニ供スルハ従ナリ」と、レーダーの役割をまとめている。その他に編隊を組んで雲の中を飛行する場合、「友軍機ノ識別ニモ用フルコトアリ」とも述べている。前述のノルデン爆撃照準器が使えない場合は、やむなくレーダーで目標を探して爆弾を投下した。しかし、「ソノ命中精度ハ前述ノ如ク極メテ低シ」と評価している。レーダーのブラウン管は「レーダー」手と航法士の所に配置されていた。故障が多く、「レーダー」手が「故障恢復ノ為」に苦勞した。だから、「現用ノモノ 未ダ試験的域ヲ脱」していないと結論づけている。

レーダーは「一分間六四〇「プルシーズ」ノ発振□□」のものであった。半径三〇マイル先の映像を標準としたが、さらに四〇、五〇マイル先の映像も可能であった。「雲、煙霧、乃至夜間ニ於テモ透視可能ナル筈ナルモ」、実際には「時ニヨリ大ナル差異」があったと述べている。当時のレーダーの性能に今ひとつ信頼できない所があったというべきであろうか。

また、「映像区画ハ四、一〇、二〇、五〇、一〇〇哩ノ五ケノ「スイッチ」ニヨリテ 限界ヲ増減シ得ルト共ニ 所望ノ一局部ヲ拡大シ 鮮明ニ照準スルコトモ可能ナリ 映像中 特ニ堅牢ナル建築物ハ明瞭ニ写出サルト述ベアリ」とある。レーダーの映像は四、一〇、二〇、五〇、一〇〇マイルの五段階に切り替えて見ることができた。映像の一部だけを拡大して見ることも可能であった。投弾の際、目視が可能ならば、目視で行なう。しかし、夜間や曇天で雲にさえぎられて地上が見えない場合は、やむなくレーダーを地上に向けて照射する。地表の堅固な建築物は明瞭に写し出すことができた。しかし、全体としてレーダーの精度はまだ低かった。

次は無線についてである。まず基本的な無線機は全波送受信機であった。「全波送受信機（七〇——九〇ワット）飛行機相互間 並飛行機基地間 通達距離□□ 出力—KWトス」とあるように、これを使って飛行機相互や基地と交信した。それ以外に、「短波 中短波 及長波送受信機」、「方向探知用受信機（長波——中□□）」、「遭難時携帯無線機」といった各種の無線機も搭載していた。

飛行機同士や基地との交信には統一周波数を使った。敵にそれが知られると妨害されるので、交信に使う統一周波数は毎日、変えた。次に示すように、空襲に來た二月二日の統一周波数は八九〇〇KCであった。「周波数 各機基地統一周波数ヲ使用□□ 十二月二十一日ニ於テハ 八九〇〇KCヲ使用セリ」。

目標上空における爆撃の状況を、成都基地から四〇〇マイルの地点まで戻ってきた所で、無線で具体的に報告することになっていた。すなわち、（1）爆撃した目標、（2）照準器とレーダーのどちらを使って爆撃したか、（3）優良、可、不可、無の五段階に分けた戦果、（4）目的上空に達した機数の四項目であった。また、不時着や遭難した時「機体完全ナルトキハ 機中ノ無線機」を使い、それが使えない場合は携帯の無線機を使うことになっていた。無線機は七〇時間、使用可能だったので、その間、「五〇〇キロSR・周波数ヲ以テ 一時間二回ノ三分間ノ遭難信号ヲ發□□」して、救助を求めることができた。

B 29の重量は「十一万五千ポンド（約五十二噸）」であった。四つのエンジンのうち、二個が停止すると、さすがに水平飛行ができなくなったが、しかし、一個だけ停止した時は、「若干上昇出来得ルモ 速度ハ低下」するぐらいで、まだ飛行を続けることが可能であった。これはB 29の安定性を示していた。

「酸素マスクハ常時 装シアリテ 気密室破壊セラレタル時 直ニ酸素ヲ通セシム」。B 29の機体は気密構造になっていて、搭乗員は常時、酸素マスクをつけている必要はなかった。しかし、機体が損傷を受け、気密状況が損なわれ

た時は、直ちに酸素マスクをつけるようになっていた。これは現在の旅客機と同じである。

機関士（マックコーミック中尉）は「最高二五〇〇呎迄 上昇セシコトアリ」と述べ、B29の飛行高度の最高を二五〇〇〇フィート＝約七六〇〇mとしている。しかし、実際は一一四〇〇mまで可能であったから、能力を割り引いて供述している。

「潤滑油ハ パラフィン系ノ鉱油ヲ使用」という。「消火装置ハ 二酸化炭素ヲ使用ス」とある。また、「使用燃料ハ 一〇〇オ（ク）タン価ナリ」といつている。日本がせいぜい八〇だったから、より高いレベルのオクタン価の燃料を使っていた。「内地ト満州トノ連続爆撃ハ燃料ノ節約上 希望シアル所ニシテ」とあるのは興味深い。B29の航続距離からいって、成都からでは北九州や満州国南部が限界であった。そこで、燃料節約のために両方を一度に連続して爆撃しようというのである。

B29には迎撃してくる戦闘機と戦うために銃座が、機体の上下、左右、尾部の五ヶ所に備えられていた。二人の捕虜は射手なので、どちらかが次のように供述している。「自分ノ任務ハ口径五〇ミリ□ 射スルニ在リ弾丸ハ一〇〇〇発□」。口径（径）五〇ミリの箇所に「？」がふつてある。これは〇・五インチ、すなわち一二・七ミリの誤りである。口径一二・七ミリの機銃で、迎撃してくる戦闘機と撃ち合った。

弾丸の種類は三つで、通常弾三、焼夷弾一、曳光弾一——この五発を繰りかえし並べて弾帯を作った。尾部の銃座は後方から攻撃してくる敵機を撃つためのもので、ここだけ「口径大ノ火炮アリ」というように、二〇ミリの機関砲が備えられていた「図3」。一機のB29に銃座が五つ。一つの銃座ごとにおのおの一〇〇〇発（五〇〇〇発という記載もある。）の弾丸を持ち、撃ってくる。さらに編隊を組んでいるので、多数の機から同時に応戦された。日本側の戦闘機はこの厚い弾幕をかいくぐって攻撃せねばならなかった。

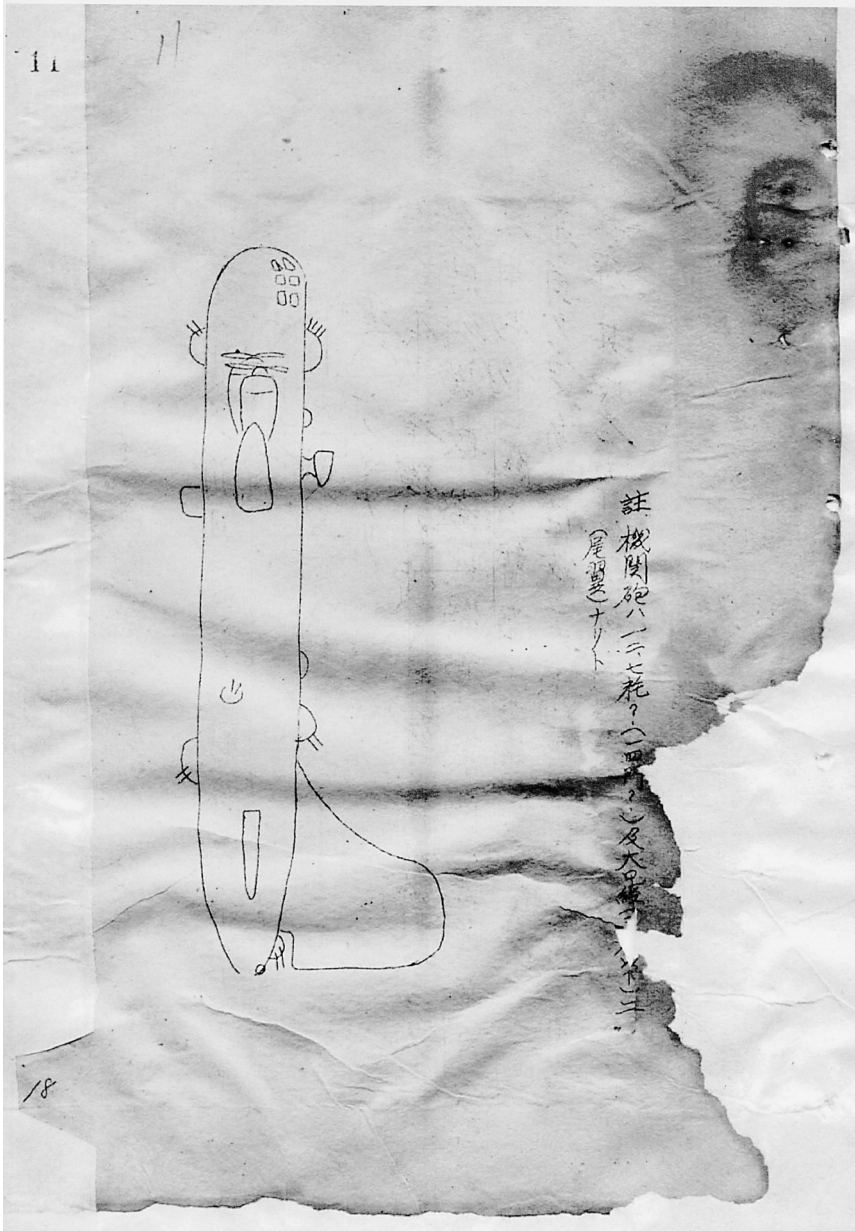


図 3

機の前方から追ってきた敵機を射撃する場合、主翼やエンジンが邪魔になって射撃できない死角ができた〔図4〕。機の真上、真下、および正面から迎撃してくる敵機に対応する機銃が少なかったが、しかし、編隊を組むことで、相互に弱点を補い合うことができた。単発機がオスカー、双発機がジャーク。——これはアメリカ側が日本軍の迎撃戦闘機につけていた名前である。単発機は陸軍一式戦「隼」、双発機は「屠龍」か。

【四】 出撃の航路

戦後の資料によれば、一二月七日は一〇八機、出撃。その内、八〇機が投弾。しかし、B29の損失が七機というから、かなりの損害であった。また、二一日は四九機で出撃。一九機だけが投弾。ということは半数以上の機がなんらかの理由で投弾できなかったことになる。成都から奉天までの往復飛行は、B29の航続距離ぎりぎりであって、元々、余裕は少なかった。こういった事情も関係していたかもしれない。この時、二機損失。「十二月二十一日ノ状況 爆撃ニ参加セルハ四戦隊ニシテ 各戦隊九乃至一〇機ニシテ合計四〇機内外ナリ」という供述内容は、四九機出撃という戦後の記録とひどく違ってはいない。

出撃命令は口頭で伝えられた。出撃に当たり、担当ごとに必要な地図や航空写真や暗号書類が交付された。しかし、次の資料が述べるように、下士官である射手には攻撃目標しか知らされなかった。「出発直前、方向士二ハ□□ 通信士二ハ暗号書類ヲ交付セラレタリ□□ クス、ハース等ハ攻撃目標ノ外、聞知シアラズ」。

成都A—5基地を午前三時に発進。ということは同基地には夜間の発着施設が備わっていたことを示す。成都——安康——龍口——葫蘆島——大遼河——奉天のコースをとる。この経路は「ベースコース二〇」と呼称されていた。

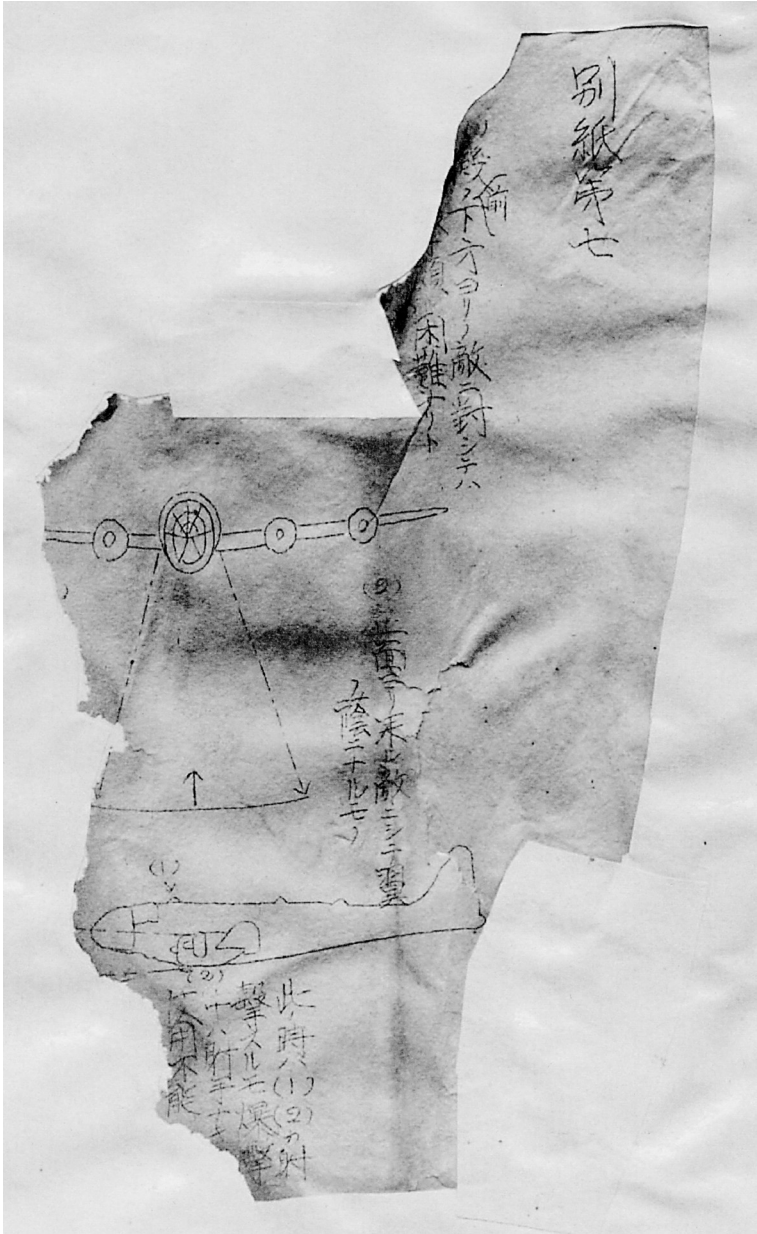


図4

「成都ヨリ安康ニ直進」とあるように、成都から陝西省南部の安康市をめざす。安康市は日本軍に占領されていなかったから、そこまでは電波で誘導できた【図5】。安康市を通過後、航路を変更。山東半島の港町の龍口をめざす。

「航法ハ天文航法ニシテ 「ポイント」 上空ニ於テ 「レーダー」 及「電波」 ニヨリ航法手ハ其ノ位置ヲ確認シツツ所命ノ目標ニ直進ス」とある。天文航法によって、ポイントに到達。そこで、航法士はレーダーや電波で位置を確認した。

龍口で黄海に出る。それまでバラバラに飛行していたが、龍口上空で編隊を組む。「龍口上空ニ於テ集結ヲ完了セリ 集結高度一五〇〇〇呎」。この時の高度が一五〇〇〇呎（フィート）≒約四五七〇m。三機で一編隊。編隊が四つ集まって、一二機になる。編隊を組むために集結するが、その際、「集結ハ電波ニヨラズ 目視ニヨル」とある。

一つの編隊が前に出て、その後に三つの編隊が横に並ぶ。編隊を組む効果をあげるために、編隊を組む飛行機同士はかなり近づく。平面的に見ると、主翼の先端部分が互いに接しているほどである。

味方機同士の接触を避けるために、高度を変える。一つの編隊を組む三機は互いに五〇呎≒約一五m、また、各編隊同士では一五〇呎≒約四六mの高度差を取った。

龍口から次に葫蘆島をめざす。地図にTP（ターニングポイント）と示されている。ここで航路をまた変更。遼河の河口をめざす。遼河の河口を選んだのは、目視の場合でも、あるいはレーダーを使う場合でも確認しやすかったためであろう。「又TPハ爆撃目標ノ始メテ見エル地点ニシテ 以降ハ爆撃手ノ誘導ニヨリ目標ニ侵入ス」とある。地図を見ると、TPとIPは一直線上に位置している。したがって、この場合はTPの地点から、すでに爆撃手が誘導して目標に向かっている。

遼河の河口付近にIP（イニシアルポイント）が図示されている。攻撃目標の奉天市にもう近い。「爆撃高度二〇〇〇

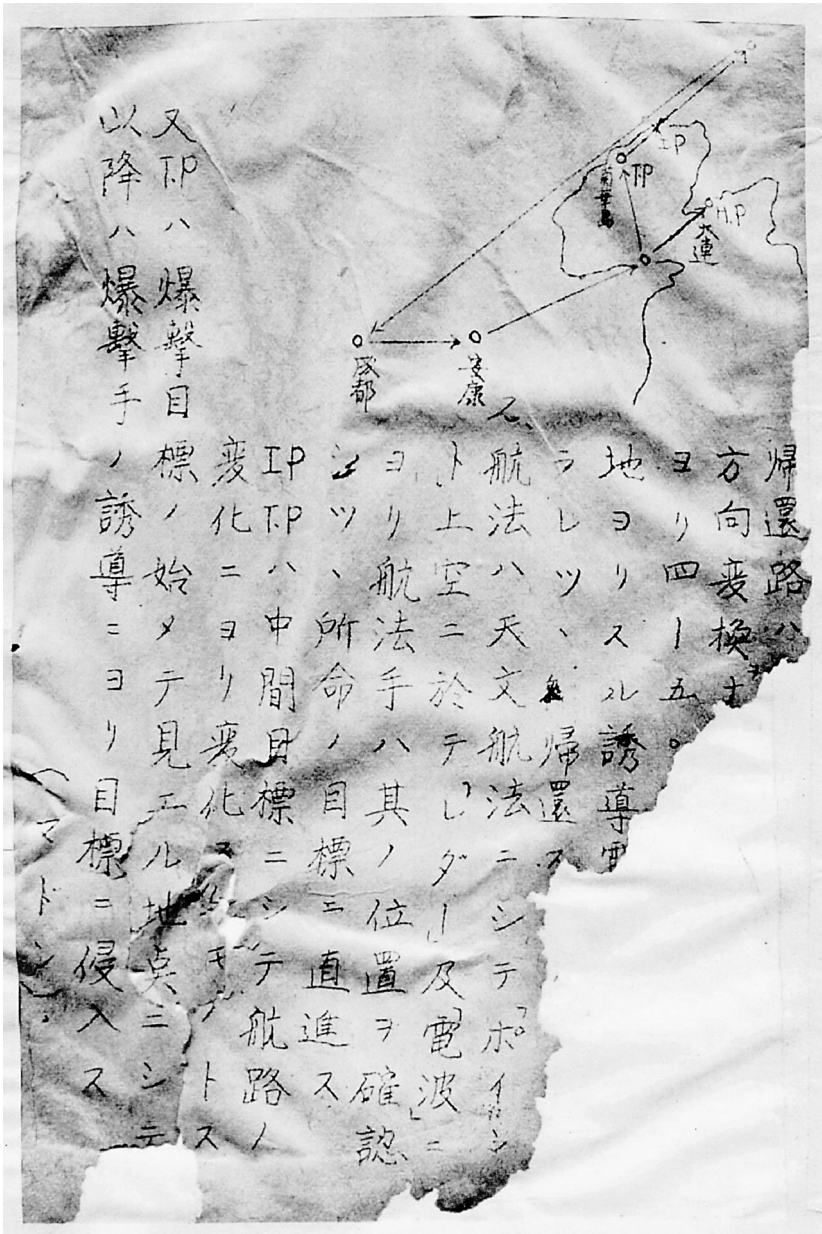


図5

○呎 時速二〇〇哩」とある。高度を二〇〇〇呎＝約六一〇〇mにあげる。その時のスピードは時速二〇〇哩＝約三二〇キロ。意外と遅い。

IPから、一〇分間、直線飛行で、攻撃目標の奉天市の満州飛行機の工場上空に到達。編隊を組む一二機が一斉に投弾する。その後、左まわりで奉天市上空を回り、直ちに帰路につく。成都基地からの誘導電波に乗り、一直線に帰還する。帰路、基地に帰還する旨を打電する。敵の日本機の来襲と誤解されて、攻撃されるのを防ぐためである。こうして、成都基地に帰還する。

しかし、実際にはキャンベル大尉を機長とするB29は撃墜される。「発火地点 正操縦者足下 □ ヨリ発火火災」とある。高射砲弾の弾片か迎撃戦闘機の銃弾に、先頭部の操縦席の下部を撃たれ、そのため、発火、火災を起こす。墜落必至と判断し、機長の命令で搭乗員全員が落下傘で降下。鞍山西北約九〇キロ地点で捕虜になってしまう。

満州飛行機の工場は満州国内にあった。満州国内に暮らしている中国人に対してはなるべく被害が及ばないように配慮せねばならない。だから、焼夷弾で街全体ごと工場を焼き払うことは不適當であった。通常の爆弾で工場だけを精密に爆撃する必要があった。この時、五〇〇ポンドの通常爆弾を使用した。別に焼夷弾も多少、投下したようである。

低空まで下りてきて爆撃すれば、爆撃の精度はたしかに向上する。しかし、日本側の戦闘機などの反撃もそれだけ受けやすくなる。成都から奉天までは遠いので、護衛の戦闘機は随伴できない。そこで、やむをえず高空から爆撃せざるをえなかった。こういった事情から、命中弾の比率は比較的少なく、効果は不十分であった。

空襲は多数の機で行なった。そのあとB29が単機で飛来して、空襲の戦果を確認した。爆撃手が写真も撮影した。出撃の際、あらかじめ一、二ヶ所の補助目標を定めていて、天候や飛行機の状態によって第一目標に対する爆撃が困

難な場合、補助目標を爆撃することになっていた。今回の出撃では大連および鄭州が補助目標に設定されていた。

また、日本側は取り調べで、アメリカ潜水艦が渤海湾まで進入しているかいなかを問いただしている。たしかに渤海湾で潜水艦が待機していれば、日本側の反撃で傷ついたB 29が渤海湾に不時着し、その搭乗員を潜水艦に収容することができた。しかし、狭い渤海湾に潜水艦を進入させる危険が大きいことから、潜水艦は渤海湾まで入ってきていないと結論づけている。

爆撃したあと、B 29は成都基地からの誘導電波に乗って、まっすぐ一直線に帰還している。そのことをあらかじめ知っていたら、日本側は帰路に戦闘機を配置して、待ち伏せ攻撃ができる。被弾して多少損傷したり、あるいは機銃弾をほとんど打ちつくしたB 29を襲えば、撃墜できる可能性は高かった。しかし、一九四五年に入ると、第二〇爆撃飛行戦団は成都基地から撤収し、太平洋のテナアン島に移動していったから、一九四四年一月二二日の満州飛行機への空襲は、満州国内の軍事施設をねらったものとしては最後になった。だから、実際には奉天空襲の帰路にあらかじめ戦闘機を配置しておいて、待ち伏せ攻撃をかけることはしていない。

もし仮に、その後も奉天空襲が続行された場合でも、日本側がそういった措置をとりえた可能性は低い。その理由は、満州国内（関東軍）と中国本土（支那派遣軍）では軍の管轄が違って、両者が協力して対処しにくかったであろうからである。

結局、満州国内でB 29の空襲を受けたのは鞍山の製鉄所と奉天の満州飛行機の二ヶ所だけであった。満州国の防空体制は本土に比べ弱体だったが、B 29の空襲の回数がわずかだったので大きな破綻を示さずにすんだ。前述したように成都基地がB 29の基地として不十分だったので、満州国をそんなに頻繁に空襲できなかったのである。

【五】捕虜の口の軽さ

一二月七日の空襲の時の捕虜の訊問調書は、一〇日（奉憲防第三七号）と一日（奉憲戦第九七一号）に作成された。また、二一日のものは二七日（鞍憲防第一八号）に作成された。したがって、いずれの場合も、捕虜にしてから一週間以内という短期間に訊問調書が作成されている。短期間に、これだけ多くの事がらを、憲兵隊はいつたいどのようによ捕虜から聞き出したのであろうか。不思議である。

憲兵隊は当然のことながら、おどしたり、すかししたりして、捕虜から有用な情報を得ようとする。一方、次に述べるように、アメリカ軍は捕虜になった場合でも、氏名、年令、認識番号を述べるだけで、あとはいつさい、しゃべる必要はないと教育していた。「俘虜トナルモ 氏名 年令 認識番号ノ外 供□□ト教育セラレアリ」。

そのような教育を受けていたにもかかわらず、B29搭乗員の捕虜たちは、これまで具体的に紹介してきたように、一週間以内という短期間に、本来、敵側に秘匿すべき部隊編成、B29の性能、出撃の航路などまで、実に多くのことをしゃべっている。しかも、下っぱの兵隊ではなく、本来、軍の中核をなす将校までが、しゃべらなくてもよいことを平気でしゃべっている。そこには軍事秘密を秘匿しようという意識が感じられない。口の軽い、おしゃべりなアメリカ軍航空将兵というイメージが浮かんでしまふ。

捕虜から重要な軍事情報を聞き出そうとしたら、相当な英語の能力が必要である。さらに飛行機についての専門知識がなければならなかった。だから、憲兵隊だけでは無理であった。実際の取り調べは憲兵隊ではなく、鞍山満州第一六六一〇部隊で、憲兵立合の下に行なわれた。捕虜にした場所の近くにあった部隊に、とりあえず彼らを収容したのであろう。この部隊のことはわからないが、ひよっとすると航空隊だったかもしれない。英語の得意な航空隊

の隊員が、豊富な航空知識をもとに直接、訊問に当たり、憲兵はその横で聞いていたのであろう。

英語を上手に話せる航空隊の隊員が、いわば同じ飛行機乗り仲間という気安さで、捕虜たちと気軽に雑談する。その雑談の中から重要な証言を得ていったのかもしれない。拷問を加えて聞き出す方式よりも、このほうがずっと有効だったように思われる。

実は捕虜になった日本軍の将兵も、往往にして口が軽く、軍事機密までしゃべっている。殺されるのではないかという恐怖心が前提にある中で、取り調べ側にけっこう迎合して、話してはいけないことまで話している。この捕虜特有の心理に起因する迎合的な態度は、アメリカ軍将兵にとっても、おそらくあてはまった。だから、取り調べ側が特に策を弄さなくても、彼らは自分から進んでB29の秘密をとくとくとしやべったのではなからうか。B29搭乗員の捕虜の口の軽さは、捕虜特有の心理から来ていると理解しておく。

また、搭乗員全員を捕虜にしたことは訊問側に有利であった。これだけ短期間に重要な供述を得られたのも、あるいはこのことが与っていたかもしれない。すなわち、もし何人かが戦死していれば、取り調べでたずねられた時、捕虜の側は、その件は戦死した仲間が担当していたものであって、彼以外は知らないといって追求をかわすことができ。しかし、全員が生存している以上、そのような方法を取れなかった。また取り調べ側は捕虜の供述内容の差異を利用して、追求することもできた。

一九四四年一二月は、B29の空襲ではまだ早い時期に入る。この時点で、満州国の憲兵隊がB29の部隊編成や性能その他について、ここまで広範な知識を得ていたことは意外である。今回の訊問調書はすべてガリ版刷りである。相当地部数が印刷され、関係部署に配布されたはずである。その後、B29の徹底的な空襲を受けることになる日本内地にも当然、送られたであろうから、満州国で得られた情報を内地でも利用できた。

しかし、今回の訊問調査から知ることができた情報は、その後、内地であまり生かされたようには思われない。たとえば、B29が最新式のノルデン爆撃照準器を備えていたことは、迎撃する日本側の共通認識になっていたであろうか。同照準器を使用するため、投弾前の一〇分間、爆撃手が飛行機を操り、目標までやや低速で、一直線に飛行して行くことを、日本側は広く知っていたであろうか。

満州国で捕らえた捕虜から得られた情報が、その後の日本本土におけるB29との戦いに有効に生かされたようには思われない。満州国でせっかく貴重な情報を入力し、それを本土に送っても、本土の側はそれを有効に活用できなかった。情報すばやく日本本土の防空部隊に伝達することができなかった。結局、両者をつなぐ情報のパイプが、どこかで詰まっていたのである。

最後にちよつと奇妙な資料をあげる。「参考 一 機長ジョンキャンベル大尉□□ 時間ニシテ 無灯火着陸ニ依□□ 性従順 技倆優秀ニシテ 利用価値大ナリト認ム 二 機関士マックコーミック中尉ハ 技倆十分 □□ルモ 従順ナルヲ以テ 之亦 利用価値□□ ト認ム」

このように、機長と機関士の二人にわざわざ利用価値があると認めている。あるいは、この二人が特に口が軽く、軍事機密をより多く供述したのかもしれない。それにしても、アメリカ人捕虜に対して「利用価値大ナリト認ム」というのは、やはり気にかかる表現である。これをどのように理解すべきであろうか。——私は、満州国の憲兵隊がこれまで使っていた、いわば決まり文句がたまたま、ここに出てきてしまったと理解する。

すなわち、満州国の憲兵隊がこれまで扱ってきた捕虜は、ほとんどすべて中国人であった（匪賊討伐という場合の匪賊に当たる）。しかし、彼らを収容する、いわゆる捕虜収容所のような施設はなかった。中国人の捕虜はただちに処刑するか、あるいは七三一部隊に実験材料として「特別移送」するかして、殺してしまった。ただ例外は、逆スパイ

として利用が可能と判断される場合であった。その時、「利用価値大ナリト認ム」という理由をつけて、やっと殺さずに生かしておいた。

今回、アメリカ軍人としてB29の搭乗員が捕虜になる。これは満州国の憲兵隊にとつて、ほとんど初めての事例であった。戦時捕虜である彼らは、当然、捕虜収容所に収容せねばならない。それでも、満州国の憲兵隊としては、「利用価値大ナリト認ム」という、従来からの決まり文句をつけないと、なんとなく、おさまりがつかなかつたのではなからうか。要するに、満州国の憲兵隊の感覚からすると、この文句がないと、彼らを（殺さずに）捕虜収容所に送ることができなかつたのである。

【補注】朝日新聞大阪本社の永井靖二記者のご尽力によって、吉林省档案館所蔵の関東憲兵隊資料を利用することができた。このことを、ここに記して感謝の意を表するものである。また、本稿で扱った、満州国で捕虜になったB29搭乗員の証言については、すでに永井記者が『朝日新聞』（大阪本社版）二〇〇五年八月二五日（夕刊）紙上で紹介していることも、合わせて記しておく。